扉をあけるその先に

北斎

日本が影響をあたえた世界の文化

第1章

北斎からドビュッシーまで響く波の広がり

Hokusai Katsushika

Stéphane Mallarmé

Claude Debussy

Edouard Manet

キャスト（五十音順）

伊東健人 マラルメ

梶裕貴 マラルメ

高木渉 マネ

土田玲央 マラルメ

土屋神葉 ドビュッシー

代永翼 マラルメ

鉄井裕和 江戸木版画摺師（実演）

西山宏太朗 ドビュッシー

橋本全一 マネ

畠中祐 ドビュッシー

濱健人 ドビュッシー

作・演出｜保科由里子　照明｜稲葉直人　音響｜佐川敦　衣裳｜ゴウダアツコ　映像｜垣内宏太　演出助手｜木村孔三　美術・舞台監督｜深瀬元喜

2022年7月14日(木)～17日(日)

すみだトリフォニーホール 小ホール

主催｜(株)レモンアンドオレンジ　丸和繊維工業(株)　協力｜墨田区　TUFF STUFF　特別協力｜(株)版三　制作｜tsp

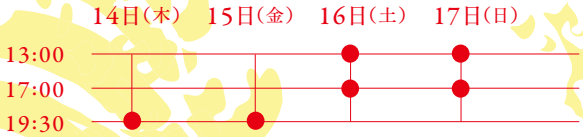
日本の偉大なる巨人、北斎への讃歌！
舞台と美術展の同時開催

世界で最も有名な日本人と称される葛飾北斎。
北斎と聞いてまず頭に浮かぶのは、このチラシのオモテにも描かれている波の絵（神奈川沖浪裏）ではないでしょうか。北斎が長年に渡って描いてきた波の作品の中でもダイナミックな構図と、静と動が交錯する傑作として、海外でも“The Great Wave”の呼称で知られています。
世界中に影響を与えた北斎の魅力を感じ取っていただくこの企画は、声の優れた俳優と浮世絵の摺師による、いわば「他流試合」とも言えます。書き下ろしのドラマのリーディングと、あの波の絵のオリジナル木版による手摺り実演のステージ。今までそれぞれの活動の中で培ってきた才能が、今回の舞台の上に集結します。
さらに、会場ロビー空間には、ところ狭しとたくさんの浮世絵を展示。ホンモノの浮世絵を間近で体験していただく美術展を開催しています。
見て、聞いて。立体化された新しいカタチで北斎を体感してみてはいかがですか。

これぞ見て聞く醍醐味

「扉をあけるその先に」
～北斎からドビュッシーまで、響く波の広がり～

日時
2022年7月14日（木）～17日（日）



7/14・夜	マネ＝橋本全一	マラルメ＝土田玲央	ドビュッシー＝畠中祐
7/15・夜	マネ＝橋本全一	マラルメ＝代永翼	ドビュッシー＝土屋神葉
7/16・昼	マネ＝高木渉	マラルメ＝伊東健人	ドビュッシー＝濱健人
7/16・夜	マネ＝高木渉	マラルメ＝伊東健人	ドビュッシー＝濱健人
7/17・昼	マネ＝高木渉	マラルメ＝梶裕貴	ドビュッシー＝西山宏太朗
7/17・夜	マネ＝高木渉	マラルメ＝梶裕貴	ドビュッシー＝西山宏太朗

会場
すみだトリフォニーホール 小ホール

スタッフ
作・演出｜保科由里子　照明｜稲葉直人　音響｜佐川敦
衣裳｜ゴウダアツコ　映像｜垣内宏太　演出助手｜木村孔三
美術・舞台監督｜深瀬元喜

キャスト（五十音順。配役変更の可能性あり）
伊東健人（マラルメ）　梶裕貴（マラルメ）
高木渉（マネ）　土田玲央（マラルメ）
土屋神葉（ドビュッシー）　西山宏太朗（ドビュッシー）
橋本全一（マネ）　畠中祐（ドビュッシー）
濱健人（ドビュッシー）　代永翼（マラルメ）
―
摺師｜鉄井裕和　控え摺師｜岡田拓也

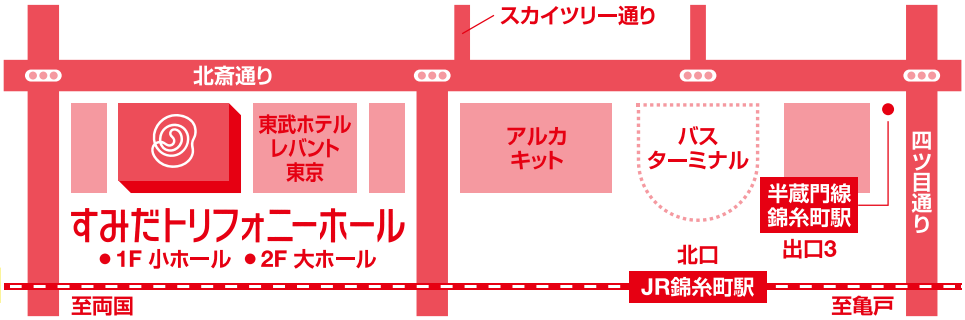
料金　8,800円（全席指定・税込）

一般発売日　7月1日（金）10:00

チケット取扱
チケットぴあ　0570-02-9999（Pコード 513-242）　https://w.pia.jp/t/tobisono
公式HP　https://hokusai-tobira.com
お問合せ　info@hokusai-tobira.com

主催｜（株）レモンアンドオレンジ　丸和繊維工業（株）
協力｜墨田区　TUFF STUFF　特別協力｜（株）版三　制作｜tsp

ものがたり

「扉をあけるその先に」
～北斎からドビュッシーまで、響く波の広がり～

19世紀後半から20世紀前半のパリ。マネやドガ、モネやゴッホ、ルノワール、といった、スーパースターの画家たちがひしめき合っていた時のこと。
彼らは、これまでの芸術家たちが縛られてきた、描写のルールに疑問を持ち始め、葛藤しながら創作活動を続けていた。そんなある時、遥か遠く日本から届いた郵送物の包み紙を見たマネやドガは大騒ぎ。それは北斎の描いたイラスト画だった。表現の自由さに心を動かされ、それからというもの、彼らはこぞって北斎を、そして浮世絵を真似るようになり、パリでは日本ブームが巻き起こる。
音楽の世界に於いてもワーグナーが音楽界を支配し、新しい才能も右にならえ状態。ドビュッシーもワーグナーを意識しすぎて葛藤していたが、画家たちの話を聞いているうちに、北斎を感じ取ってゆく。そして、音楽と絵画の世界を言葉で取りまとめた詩人マラルメによって著された「牧神の午後への前奏曲」で、マネの美術とニジンスキーのダンスを入れ、ドビュッシーはワーグナーの楽劇に並ぶ総合音楽作品を作り上げてゆくのだった。